

収録・解説 酒井董美

語り手 山口忠光さん
(明治40年生まれ)

昭和63年8月20日収録

あらすじ

昔、侍になりたい男がいた。旅に出て山の峠にさしかかると、石の上へ腰かけた侍がいる。黙って通れば無礼者と思われ、男が声を掛けると、侍は目をむいて死んでいる。侍は「侍になりたいと思ってる男は、その侍の着物を着て、刀を差して行ったら殿様の行列が来たので、畑に飛び降りて隠れていた。」

運の良いにわか武士

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

戸籍は「炮烙売の出世」

宿へついた。悪い家来殿様が「何でこれを知まるようになった。もおつて、「殿さんを殺した」と言われる。」わたしは「一晩のうち片っぱら、それとは知らず、青菜うずつしか寝ません。夜カンピョウが隣の部屋で中まで右の目で寝たり、見たら弓がある。槍もあやみくまに左の目で寝ます。半分の目は起きどりとねらっていた男の目へ、男は褒美をもらった。当たり前死んでしまった。またついで次の宿へ泊る。逃げたらないけん」と思つて、「わたくしがやりませう」と言つた。

行きがけに米の粉をなめていたから、その粉を2袋買って他の家来といっしょについて行った。蛇のすんでいる池まで行って「家来がおらにや、おら逃げただけ」とぶつぶつ言っていたら、池の中から蛇が頭を出つたからである。

閑敬吾博士の『日本昔話大成』によると「笑話」のおいた粉を袋ごと、蛇の口めがけて投げたら、袋を蛇がぐわえた。中が粉だから、蛇は喉へつまつて息がでさずのびてしまった。死んだ死んだ、

おまえらち、これをひっこつて持つて帰ろう」と持つて帰った。青菜カンピョウはまた褒美をいただいた。

しかし、「いつまでもこんな話ばかりはないから逃げにやあいけん」と夜の間に、宿を抜けて逃げてしまつた。

解説

語り手の山口さんは、コクのある男性には珍しいにみごとな語り手だつた。それというのも20歳代のころ、積雪が深い折、地区内の児童のいる家を訪ねて昔話を語って喜ばれていた経歴をお持ちだからである。

閑敬吾博士の『日本昔話大成』によると「笑話」のおいた粉を袋ごと、蛇の口めがけて投げたら、袋を蛇がぐわえた。中が粉だから、蛇は喉へつまつて息がでさずのびてしまった。死んだ死んだ、

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日に掲載)